

婚礼衣装02

日本の伝統的な礼装、婚礼衣装は神事の要素を数多く持っています。
その移り変わりを時代とともに紹介し、婚礼衣装に隠された奥深い意味を探ります。

◆花嫁衣裳の数々

花嫁の正礼装、白無垢。

白は清純無垢を表わす色、「新しく生まれ変わります」「嫁ぎ先の家風に染まります」という心を示すとも言われています。打掛け、着物、帯、小物類をすべて白で整え白の角隠しか綿帽子をかぶります。

白無垢の打掛けを色とりどりの絹糸で織り上げたものや精緻な友禅で描いた華やかな打掛けに掛け替えた姿が色打掛けです。

■振袖。昔は三枚も重ねて着ていた！

花嫁衣裳のひとつである振袖は、江戸から明治時代にかけて大家の女性たちの礼装の名残。引きの黒振袖は豪商の娘や特権階級の女性のもので、江戸中期の振袖は未婚女性の礼服とされていました。もともとは大家の夫人は日常から着物の裾を引いていましたが、大正時代には花嫁衣裳だけに残り、一般的には引かなくなりました。昔は黒地・赤地・白地・の三色振袖を同じ模様や松竹梅などの文様で染め、三枚着ることもありました。その名残から今でも赤の比翼をつけるのです。

■頭に付ける、かつらのルーツ

古代には五味(さねかずら)、忍冬(すいかずら)・(くずかずら)などの「草かつら」を頭に捲く風習がありました。「かつら」の語源も「かみかずら」という説があります。古事記にも花や葉っぱ、糸などを飾る、いわゆる「花かつら」などの記述があります。

花嫁のつける「つのかくし」もこの桂捲きの名残で、これは浄化された神祭りの齋服を示しています。

◆新郎衣裳の遍歴

花婿の正礼装は黒羽二重の染め抜き紋付き紋服に仙台平の馬乗り袴。江戸時代までは、紋服は公家・武家のもので、格式の高い家が裕福な家などでだけ用いられていました。明治になり官吏の礼服をフロックコートと定め、判任官以下で羽織袴で代用を認めることとなって、最高礼装の和装となりました。

◆幸せを願う、打掛けの吉祥文様

白無垢や色打掛けに織込まれた吉祥文様には、ふたりの門出を祝い・幸せを願う意味が込められています。代表的な文様のいくつかをご紹介します。

亀甲

いつまでも長生きしますように長寿を願う文様

鶴

一度つがいになると生涯一緒にいる鶴は永遠の愛を表す文様。

松竹梅

長寿と永久の繁栄を願う松、節度と潔白の象徴とされる竹、早春に咲き大変めでたいとされる梅。寒さに耐える松竹梅は古くから「歳寒三友」と讃えられています。

扇面

扇は末広とも呼ばれ、末広がりの幸せ、輝かしいふたりの将来を願った文様。

鳳凰

優れた天子が生まれるときに現れるといわれる想像上の瑞鳥。中国より伝来した文様で、中国では君主祝福と万人の平安をもたらす寿福の象徴。

青海波

寄せては返す波の永遠に、末長く続く花嫁の幸せを表した文様。

婚礼衣装Q&A

Q. 昔のお嫁さんも顔を真っ白に塗ってたの？

A. お白いが本格的に普及したのは江戸時代。髪を結うようになって襟元が見えるようになり、顔だけでなく衿・首・胸なども一緒に白く塗ることがお化粧の一つとなりました。